

ICT を活用した古典の授業づくりについて — 『徒然草』 「仁和寺にある法師」 —

中野 貴文

I 古典教育とアクティブ・ラーニング

周知の通り、平成28年12月21日付で中央教育審議会が取りまとめた「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」では、次期学習指導要領の改訂に向け、幾つかの明確な方向性が打ち出されている。その一つが、「主体的・対話的で深い学びの実現」、すなわち今日の教育を語る上で最大のキーワードとなっている、アクティブ・ラーニングの重視であることは明らかであろう。稿者もこれまで古典文学の専門家兼教育者として、問題関心を同じくする研究者数名と「日本文学アクティブ・ラーニング研究会」を立ち上げ、大学間の垣根を越えた合同ワークショップを開いたり、互いの授業アイデアをシェアしたりするなどの活動を続けている¹。また、いわゆるドラマ教育を古典の授業に導入し、学生たちに身体的に古典と向き合うこと、及び古典の世界を自身の表現へと取り込むことの重要性を伝えてきた²。文法の記憶、あるいは本文暗唱が中心の現状の古典の授業は、どうしても受身になりがちであり、結果、中高生の古典嫌いを増やしているという現状を鑑みたとき³、古典教育におけるアクティブ・ラーニングの導入は喫緊の課題であるといわざるを得ない。

しかし上述した諸実践を進めつつも、常日頃大学等の授業において痛感することは、古典文学教育においてアクティブ・ラーニングを行うことにともなう本質的困難である。いったい、古典を読解するためには、前提となる知識（例えば階級社会であった当時の政治システムや結婚等に関する習慣や価値観の存在など）の教授が不可欠であり、その過程においてどうしても学習者は受身にならざるを得ない。しかしだからと言って、これらの学習を軽視したままいたずらにアクティブ・ラーニングを重視した授業を組み立てたとしても、古典の学習としては浅いものになってしまうだろう。上掲の中教審の答申が、「主体的・対話的」に続けて「深い」という言葉を置いたのも、如上の懸念が念頭にあったものと思われる⁴。

どうすれば古典読解のための知識教授を、学習者の主体的な学びの中で実現できるのだろうか。以下、本稿はその方途の一つとして、ICT機器を利用した古典学習の可能性を提示するものである。具体的には『徒然草』第五十二段を俎上に載せ、稿者の専門である中世文学研究の知見を援用しながらその読解を試みるとともに、その過程でICT機器を用いることの有用性について言及しつつ、新たな古典教育の授業構想を提案したい。

II 仁和寺から石清水へ

『徒然草』第五十二段「仁和寺にある法師」の話は、中学校二年生向けの教材として、数多くの

教科書に採用されている⁵。中学国語の教材としては定番中の定番といえること、及び後述する通り、ICT機器の有効性を十分に発揮することが期待されること、以上二点が当該教材を取り上げる大きな所以である。さほど長くはない章段であるため、まずは以下に全文を挙げることにしたい。

仁和寺にある法師、年寄るまで石清水を拝まざりければ、心憂く覚えて、あるとき思ひ立ちて、ただ一人、徒歩より詣でけり。極楽寺・高良などを拝みて、かばかりと心得て帰りにけり。

さて、かたへの人にあひて、「年ごろ思ひつること、果しはべりぬ。聞きしにも過ぎて尊こそおはしけれ。そも、参りたる人ごとに山へ登りしは、何事かありけん、ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて山までは見ず」とぞ言ひける。

少しのことに、先達はあらまほしきことなり⁶。

仁和寺の法師にまつわる、著名な滑稽譚である。第一段落と第二段落で法師の行動が記され、最後の第三段落には説話の話末評のように、筆者兼好の感想・考えが述べられている。授業としては、なぜ筆者はかような感想を抱くに至ったのか、筆者は法師をどのように見ているのか、などが問われることになるだろう。その前提として、第一段落と第二段落に描かれた法師の行動とその意味するところを、的確に理解させることが必須なのはいままでもない。具体的には「仁和寺」「石清水」という歴史的事項に対する説明⁷、さらには「徒歩より詣でけり」「山までは見ず」といった法師の行動の有する意味に対する考察などが不可避である。そして、この点においてICT機器、とりわけタブレット端末は大きな効果をもたらすだろう。すぐ後で述べるように、本話の詳細な読解のためには、仁和寺から石清水までの道のり、中でもその距離の遠さをなるべく体感することが有効と思われるからである。

あらためて、第五十二段の話を読んでみよう。まずは第一段落、仁和寺の法師が年を取るまで石清水八幡宮を参拝したことがなかったので、残念に思っ、あるとき決心してただ一人徒歩で参詣したという。もちろん仁和寺や石清水に対する知識の獲得は重要だが、ここでは両者の距離へ学習者の注目を促したい。というのも、仁和寺から石清水まで法師が徒歩で参詣したというのは、この話（及び、法師の性格）を読み取る上で、鍵となると思われるからである。

いったい、仁和寺の法師はなぜ石清水八幡宮まで、「徒歩で」参ったのであろうか。いやそもそも、仁和寺から石清水まではどのくらい離れているものなのか。京都に地縁のある者以外にとっては、まずそこから検討されなければならないはずである。私たちはともすると、文学作品を文字の上だけで理解してそれで満足してしまうが、例えば距離・高さ・重さなどといった身体的なイメージを、映像としてなるべくリアルに体感することは、特に古典文学のように遠い時代・地域の作品を理解する上で非常に重要なことに違いない。

そこで今、授業を受けている生徒全員がタブレット端末を持っている状態として、仁和寺から石清水までの距離を求めさせてみることはじめよう⁸。具体的には google map 等インター

ネット上の各種サーチエンジン、それも地図検索のサイトを利用することになる。仁和寺、石清水をそれぞれ検索することで、それが京都のどの辺りにあるのか、それぞれはどれほど離れているのか、現在周囲はどのような環境なのか、至って視覚的に理解することが可能になる。

とりわけ本話において重要なのは、上記検索サイトのルート検索機能を用いれば、両者の間を徒歩で移動した場合のルートと、それにかかる時間が示されることである。例えば出発点を仁和寺、到着地点を石清水八幡宮と打って検索すると、両者間の距離がおおよそ20km、徒歩で移動した場合にかかる時間が約4時間であることが瞬時に理解されるのである⁹。両者間の距離がわかれば、同じマップ検索機能を利用して、出発点に自分たちの中学校を入れて調べるよう促せば、20km離れた場所というのがだいたいどの辺りなのか、学習者自身の生活空間に根ざした形で理解できるようになる。

以上から、生徒たちはなぜ法師が徒歩で参詣したのか、馬や牛車などを使わなかったのか、他に移動手段はなかったのかなどといった疑問を持つことが予想される。今、両者は徒歩で4時間の距離だといったが、それは現代の舗装された道を、しかも一般成人が歩く場合であり、「年寄り」ほどに年齢を重ねていた法師の場合、さらに時間がかかったとも予想されるはずだ。

そもそも『徒然草』の時代、石清水参詣には桂川・淀川などの河船を利用したコースが、既に整備されていた¹⁰。このことを生徒たちに伝えた上で、それではにもかかわらず、この法師が徒歩で向かったのはなぜなのか、グループで話し合わせたい。様々な回答が予想されるが、その一つとして、苦勞して参詣した方がいっそうご利益がありそうだから、という答えも出されるだろう。ここに至ってこの法師が、一人の個性ある人間として少しではあるが、学習者の前に立ち上がってくるのである。中世文学研究においても、はやく三木紀人氏は、法師が徒歩で参詣したのは、「道心のあかしとすべく、あえて負担の多い方法を採用した¹¹」と指摘しているが、やや過剰な信仰心の持ち主という点を理解することで、第二段落の読解へとスムーズにつなげることが可能になるであろう。

Ⅲ 石清水八幡宮とはいかなる神社か

次は石清水八幡宮について、生徒たちに学んでもらうことになる。この話を理解する上で石清水八幡宮が山上にあったこと、高良社が石清水八幡宮の摂社で山の麓にあったことは、必須の知識といえる。このことは当然、教科書にも明記されており、例えば東京書籍の教科書の場合であれば、脚注の形で「京都府八幡市男山の山上にある石清水八幡宮。麓に極楽寺と高良社とがあった」との文に加え、それらの位置関係を示すおおまかな図が添えられている。

もちろん、これでもおおよそ理解は得られるが、ICT 機器を活用することでよりいっそうビジュアルイメージの把握が可能になるだろう。教師用デジタル教科書の写真や前記インターネットサーチエンジンで石清水八幡宮と検索した結果などを電子黒板で示すことで、同宮の全体像や個々の位置関係などを、様々な角度から提示することが可能になる。例えば上空からの写真映像は、石清水八幡宮がいかに小高い山の頂上にあるかを一目瞭然に示すだろう。まさに百聞は一見

に如かずなのである。

また、生徒一人ひとりの端末からは、石清水八幡宮の公式サイト¹²にアクセスさせ、読解に必要な情報を選び出すワークを課しても面白いだろう。同サイトのどこを見れば本殿と高良社の位置関係が載っているか¹³、石清水八幡宮の歴史についてはどこを読めばよいか¹⁴など、様々な課題が考えられる。これらの活動は、情報教育の目標として¹⁵文部科学省が定める「情報活用の実践力」を鍛えることに直結するだろう。

これらのワークの過程で、生徒たちは、石清水八幡宮が当時から非常に有名な存在であったことを、同サイトの幾つかの文章から確認するであろう。ならば、それほど有名な石清水八幡宮がどのような場所にあるかということすら知らなかったこの仁和寺の法師は、世間知らずというか、どこか常人とは異なるところがあったのではと予想されるのではないか。検索し、情報を集めてそれで終わりなのではなく、その情報をいかに作品の解釈に還元できるかが重要なのである。古典の授業において、ICT を活用する技術を身につけることは学習目標の中の一つであることを強調しておきたい。

加えて、以上の活動の中で、中学生たちは自分たちの手に余る圧倒的な情報の質と量に戸惑うとともに、純粋に知的好奇心をくすぐられもするだろう。例えば「歴史と信仰」の解説に「男山は都からみて裏鬼門（南西の方角）に位置し」とあるが、いったい鬼門とは何か。また同じページ内に「八幡大神様を祀る神社は全国津々浦々に数万社ある」とあるが、例えば自分たちの町にある〇〇八幡宮¹⁶もそうか、それと石清水八幡はどのような関係にあるのか、などといった疑問が生徒たちから浮上するかもしれない。

無論、それらの中には、『徒然草』第五十二段の読解に、直接には関わらないものもあるかもしれない。しかしながら、個々の調べ学習の中から湧き上がった疑問に答えようとする姿勢こそ、「主体的・対話的で深い学びの実現」なのではないか。その全てを授業内で扱うのは難しいにしても、その内の幾つかを取り上げ、グループ内で話し合わせたり、歴史学、文学の知見に基づいて対応するなどして、学習者の学びの深まりを助けることこそ、教員に課せられているタスクではあるまいか。そのためには、教員にはさらなる教材の研究¹⁷が必須であることはもちろん、自分たちが用意してきたことを一方的に教えるのではなく、授業の中で学習者が抱いた疑問を拾い上げ、それを基に授業を作り上げるという授業づくりに対する意識の変革も求められよう¹⁸。本稿冒頭で示した 2016 年中教審において示されたのは、学習者主体の学びへの変革であったことを、付記しておく。

IV 得意げな法師

再び『徒然草』の本文に戻ろう。前節までの第一段落の読解において、この法師のやや過剰ともいえる信仰心、及びおそらくは老年に達しているながら、世に名高い石清水八幡宮の位置を把握していなかった世間知らずなところなどを確認したが、第二段落以降においても、如上の性格は看取されるのだろうか。

第二段落は、石清水から帰ってきた仁和寺の法師が、「かたへの人」に参詣について語る、その台詞からのみで構成されている。ここで「かたへの人」の反応（台詞）は全く記されておらず、結果、仁和寺の法師が案外に饒舌であるように思われる点は注意されてよい。すぐ後で触れるように、ここには自分の信仰心の強さを誇るかのような口吻が感じられるからである。

確かに、宿願を果たした喜びを率直に語る最初の一文「年ごろ思ひつること、果しはべりぬ」や、石清水八幡宮の素晴らしさをいう次の文「聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ」は、特段引っかかることはない。また続く「参りたる人ごとに山へ登りし」という、目の当たりにした不思議な光景への疑問・驚きを語るこの一節も、無知故の滑稽さは感じられるが、それ以上でも以下でもあるまい。

だが、これに続く以下の一文、「何事かありけん、ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて山までは見ず」はどうか。この一文が「何事かありけん、ゆかしかりし」で終わってれば、特に違和感を覚えることもないだろう。素晴らしい神社参詣を果たした折に、多くの人が特定の方向に向かっているのを目の当たりにすれば、そこに何かあるのだろう、それは何なのだろうと感じる、自分もそちらをのぞいてみたいと思うのは自然なことに違いない。

しかしこの法師は、そうしなかった。そしてその理由を、「神へ参るこそ本意なれと思ひて山までは見ず」と言い放ったのである。これは以下の二点において、看過できない内容となっていると思われる。一つは、山へ登る人たちを物見と決めつけていること、もう一つは、対照的に信仰心に篤い自身を誇示する物言いになっていることである。

まず法師は、自分とは異なり山を登って行く人たちが、信仰心のため（八幡宮を拜むため）にそうしているという可能性を、全く想定していない。あの人たちとは違い、自分は信仰心に篤い法師なので、山へ登るようなことはしないのだ、という理屈である。山へ登る人たちと自分との差異を、信仰心の多寡に求めていることは明らかだ。そして法師は、そのような認識を実にてらもなく「かたへの人」に伝えている。よくいえば信仰の世界にのみ生きることを、ただひたすら尊いものと捉える宗教的な純真さが、悪くいえば自らの信仰心を誇り、承認されたいという欲求が、そこに見え隠れしてはいまいか。いずれにしても、そのような過剰な信心が、結果的に法師を失敗させたことは動かないだろう。思えば、この法師が「徒歩」で石清水に参詣したのも強い信仰心の故であった。歩いてここまで来た疲労感が、法師をして登山を断念せしめた可能性はないのか。法師の言葉を、言い訳ととるのは、さすがに可哀想かもしれないが。

このように第五十二段を読み進めてきた場合、本文の最後に置かれた筆者兼好の評言、「少しのことにも、先達はあらまほしきことなり」も、また違った響きを持って聞こえてこよう。確かに「先達」、すなわちその道の先輩さえいれば、法師は失敗を免れたであろう。ただその先輩¹⁹というのは、単に仏道修行上の先輩を指してはいなかったろう。石清水八幡宮が山上にあるという、なかば常識に属する知識を教える人という意味であり、さらには、多くの人が同じ行動をとっているということは、そこにはそれ相応の理由があるのだという世俗の知恵を教える人²⁰という意味ではなかったか。本文を振り返るに、この法師は「ただ一人」で石清水に参詣していた。篤い

信仰心の代わりに、先達、周囲、世間などといった存在が、彼から抜け落ちていたのである。

なおこのように、ともすれば世間ずれした信仰心に対して、兼好が冷笑的・批判的な評価を下していることは、『徒然草』研究の中では以前から指摘されていることである。よく挙げられる章段としては、第一〇六段や第一四四段などがあるが、そこでも『徒然草』は敬虔な宗教者の純真さを、世俗への無知と紙一重のものとして、半ば突き放して見ている節がある²¹ことを指摘しておきたい。

V ICT 機器を利用した、さらなる授業展開

もちろん、これまで示してきた読解は、中学二年生にはやや難しいかもしれない²²。現状の教科書に記載されている本単元の目当て・目標、あるいは教師用指導書などにおいてもここまでの読み込みは期待されていまい。しかしながら、これに近い感想が学習者の側から発せられた場合はどうか。前節でも指摘した通り、来る学習指導要領に求められるものが、徹底した学習者視点に立った教育であったことを忘れるべきでない。

それをも踏まえて本節では、読解を中心に一通りこの単元の授業が終わった後、ICT を用いたいかなる展開が可能かについて論じたい。

ICT 教育の利点として、画像・映像を用いることで理解の促進が可能になるというメリットが挙げられること、及び古典文学の教育においては、この利点が特に重要であることは既に触れた。遠い過去の事象を扱う教科において、この利点を最大限に活かさない手はない。仁和寺や石清水八幡宮などのビジュアルデータに触れることはもちろん重要だが、さらにこの「仁和寺の法師」について、映像面から迫ることはできないか。

具体的には、本章段をドラマ化²³する場合、役者はだれがよいかを考え、キャプションをつけた画像化、あるいは動画化を試みる²⁴というものである。これまでの授業において、生徒たちはこの法師の性格について、彼の言動から様々な印象を抱いたと思われる。それをもとに、ドラマ（またはポスター）を作るなら演者は誰が適切か、まずは個々の生徒に考えてもらう。

この際に、必ずしも俳優に詳しい生徒ばかりではないことが、当然予想される。とはいえ、適切な配役を考えることがポイントとなるワークであり、身近な人や漫画・アニメのキャラクター、ハリウッド俳優などをあてはめても何ら問題はない。実現可能性を問うているわけではなく、あくまで本文を深く読み込んだ後の展開として、配役が具体的にイメージできるかが大事なのである²⁵。

ここまで読み込んできた生徒たちは、老齡、信仰心の強さ、それを誇らしげに語るある種の山っ気、世俗とのずれ、やや孤独な印象などといった、この法師の個性を思い返し、個々様々にイメージをふくらませていくであろう。そしてそれに適合する俳優やキャラの画像データを、i-pad 等のタブレット端末で検索し、表示させたい。この後 4, 5 人一組で班を作り、今度はそれらの画像データを交換しあいながら、イメージをシェアし、一つにまとめあげていくという協働学習²⁶に展開していくことも望まれるだろう。その際も、データの遣り取りが簡単で、かつ画像イメージ

を手元にもったまま活動できる ICT 機器の存在は、グループワークをよりスムーズでアグレッシブなものに変えることが期待されるのである。

最後にもう一度あらためて強調しておくが、これら ICT 機器の活躍は、これまでの時間で積み上げてきた本文の読解の蓄積があってはじめて意味をなす。竹内が指摘しているように、「ICT を使うことが目的なのではなく、よりよい授業をつくるのが目的で ICT 活用はその手段に過ぎない²⁷」点を忘れてはなるまい。そのことを肝に銘じつつ、古典文学の教育現場において、ICT 機器のさらなる活用が求められるに違いない。ICT 機器は画像データよろしく、それまで灰色の世界であった古典文学に、鮮やかな色をつけてくれる。本拙稿では『徒然草』第五十二段を取り上げたが、同様に京の都の距離感、位置関係が重要な古典文学作品（すなわち、教科書掲載のほとんどの教材ということになる。例えば『今昔物語集』のような説話や、これは京都よりも広く日本の国土全体に及ぶが『平家物語』のような軍記作品など）においても、同様の効果が期待されよう²⁸。それを手段としていかに巧みに利用するか、その蓄積とシェアとが、古典文学を教育する者にとって今後喫緊の課題となることを強調し、本拙稿の筆を擱くこととする。

注

- ¹ 詳しくは「古典文学をアクティブ・ラーニングでまなぶ—和歌を演じるワークショップ」（『リポート笠間』58、2015年5月）
- ² 拙稿「古典教育におけるドラマ実践—『伊勢物語』「芥川」より—」（『国語国文 研究と教育』52号、2014年2月）、同「研究と教育の架橋—専門性の行方—」（『国語と国文学』2015年11月号）、同「暗唱」（渡部淳+獲得型教育研究会『教育プレゼンテーション 目的・技法・実践』（旬報社、2015年））などを参照されたい。
- ³ 各種調査の結果、中高生のおよそ7割が古典嫌いという。例えば、高木まさき「教育改革の中の古典教育—あるアンケート調査をもとに—」（桑原博史編『日本古典文学の諸相』勉誠社、1997年）、鳴尾甫「古典教育再考—七割もの生徒に嫌われている古典教育からの脱却」（『日本語学』2007年2月号）など。
- ⁴ 例えば松下佳代『ディープ・ラーニング—大学授業を深化させるために』（勁草書房、2015年）は、現状、アクティブ・ラーニングが必ずしも奏功していないことに言及した上で、課題として、(1)知識（内容）と活動の乖離、(2)能動的学習をめざす授業のもたらす受動性、(3)学習スタイルの多様性への対応の三点を列挙している。
- ⁵ 2016年度より新規採択された中学校国語教科書において、シェア上位四社の全てが、同段を中学校二年生向けの教材として掲載している。
- ⁶ 引用は2016年度採択の東京書籍中学校二年生向け国語教科書『新編 新しい国語2』による。
- ⁷ 加藤郁夫『日本語の力を鍛える「古典」の授業』（明治図書、2010年）も、同段の学習に関して「古典を読むことのむつかしさの一つに、このような前提となる知識の問題がある」「文章を理解するための最低限の知識は、文章を読みながら小出しに教えていくよりも、文章を読む前に、きちんと教えていく方がよい。そうすることで、「極楽寺・高良などを拝みて、かばかりと心得て帰りにけり」という表現の意味が本当に理解できるのである」とする。
- ⁸ もちろん、かかる学習の前にまず全文の通読と音読を行い、話のあらましをつかむことが授業の1時間目として設定されるだろう。また以下に後述するワークは、全員が一斉に検索する必要は必ずしもな

く、四人一組等のグループを作らせ、それぞれのグループで検索、検討の時間を設けるのが現実的であろう。

- ⁹ 加えて同検索機能は、両者の間を車や、電車等の公共交通機関で移動した場合にかかる時間も、同様に検索することができる。生徒らがイメージをふくらませる、さらなる助けとなるだろう。
- ¹⁰ 桑原博史『徒然草の鑑賞と批評』（明治書院、1997年）
- ¹¹ 『徒然草 全訳注（二）』（講談社学術文庫、1982年）。これを受けて稲田利徳「徒歩より詣づー『徒然草』第五十二段の解釈とその周縁ー」（『徒然草論』（笠間書院、2008年））は、『徒然草』以外の作品も渉猟し、徒歩で参詣するという表現に「辛苦を敢えて課すことで、祈願成就を期待」する心性があったこと、及び「例えば、四国八十八ヶ所の巡礼も、白装束を着し、徒歩で巡礼してこそ意義があり、自動車で巡礼しても御利益はないと囁かれるのも、同じ意味として把握できよう」と、現代においてもこの観念は残っていることを指摘している。
- ¹² 「教育の情報化に関する手引」作成検討会（第5回）配布資料参照。
- ¹³ 公式ページの右上のタグの中の一つ「当宮について」をクリックし、表示された画面の右中央「境内のご案内」をクリックするとわかりやすい地図が現れる。さらにそこに示された「4 高良神社」の項には「徒然草に登場する古社」との説明があり、そこをクリックすると「石清水八幡宮にまつわる話ーはちまんさんと徒然草」というリンクに飛ぶことができる。これなどは、古典が現代にも生きて語り継がれていることを何より証明するものであり、さらなる学習へとつなげることが期待されよう。
- ¹⁴ 同じく「当宮について」のページ内、「歴史と信仰」の項。
- ¹⁵ 「教育の情報化に関する手引」作成検討会（第5回）配布資料等。
- ¹⁶ 例えば、九州の生徒なら宇佐八幡宮、首都圏の生徒なら鶴岡八幡宮など。
- ¹⁷ 八幡宮に関していえば、遼日出典『八幡神と神仏習合』（講談社現代新書、2007年）、島田裕巳『なぜ八幡神社が日本でいちばん多いのか』（幻冬舎新書、2013年）などが入手もしやすく、読みやすいだろう。
- ¹⁸ この問題に関しては、拙稿「授業の主役は教員ではなく学生」（『日本文学』2017年11月号）を参照されたい。また、生徒の「問い」を中心に授業を組み立てた例としては、青木幸子「〈文化と文学〉ドラマ手法を用いた小説読解の研究」（『跡見学園女子大学 コミュニケーション文化』第5号、2011年3月）など。
- ¹⁹ 年たけた法師に先輩が必要というの、ある意味皮肉であるようにも感じられる。
- ²⁰ もっといえば、自身の信仰心をときに相対化する必要を教えてくれる先輩でもあろう。
- ²¹ 例えばこれ以外に、高校の古典の教科書にしばしば掲載される、第236段を挙げることができる。子どもがいたずらで背中向きにされていた狛犬を、信仰心の篤さから何か特別ないわれがあるに違いないと涙した聖人の話である。なお同話の分析と授業案については、拙稿「背を向ける狛犬とすれ違う対話」（松尾葦江編『ともに読む古典—中世文学編』（笠間書院、2017年））。
- ²² 信仰心に関するテーマということにもなるため、扱いはいっそう、慎重さが求められるだろう。
- ²³ なお、古典文学の授業におけるドラマ教育の有効性については、注（2）拙稿を参照のこと。
- ²⁴ 竹内久顕氏のご教示による。なお、竹内「ICTを活用した授業づくりの方法—社会科系教科に即して—」（『教職研究』29号、2016）によれば、このアイディアは「木津奈々江教諭（和洋九段女子中・高校）の国語科の実践発表にヒントを得たものである（「NEW EDUCATION EXPO」2016）のセミナーでの発表。2016年6月3日。「走れメロス」で行ったところ、暴虐な王の配役としてマッコ・デラックスを挙げたグループがあったが、それに対して別の生徒が「マッコは乱暴な言い方はするが、意地悪なことは言わない」と言い反対したという。作品での王の人物像を的確に理解していないと適切な配役を選ぶことが難しく、生徒の読解力が試される実践」である。
- ²⁵ したがって、絵の得意な生徒に描いてもらい、キャラクターイメージにかなうCVの配役を考えるという形式のワークでも面白いだろう。

²⁶ ICT 機器を利用した協働学習の実践例としては、原田恵理子・森山賢一編著『ICT を活用した新しい学校教育』（北樹出版、2015 年）第 4 章の松田孝「iPad1 人 1 台導入」等。

²⁷ 注 24 前掲論文

²⁸ 古典作品の登場人物に配役を考えるとというワークも、同様にあらゆる古典教材に応用可能であろう。既に稿者も大学における授業において、『枕草子』『中納言参り給ひて』の中から、藤原隆家の配役を考える授業を提案、実践している。なお、詳細についてはいずれ別稿を予定している。

(本学人文学科日本文学専攻教授)